

雑談における中級日本語学習者の聴解困難点

中山 英 治[†]

Difficulties in Listening to the Casual Conversation for Intermediate Japanese Learners.

NAKAYAMA Eiji[†]

概 要

中級日本語学習者が日本語母語話者と雑談をするとき、どのような聴解の困難点を持っているのかを明らかにするために、学習者の理解の過程を発話の分析を通じて詳細に調査した。その結果、中級日本語学習者の聴解の困難点として、次の (a) から (c) が明らかになった。

- (a) 自国の文化や習慣をふまえた既有知識で未知の語を推測してしまうことがある。
- (b) 前の文脈を聞いたことで、今聞いている発話を誤解してしまうことがある。
- (c) 類似した音や部分的な音を聞いたことで失敗したり、未知の語に対して既有の漢字をあてはめて、不適切に理解してしまったりすることがある。

雑談に関する研究について調べてみると、これまでの日本語教育の分野では、「雑談の場における会話能力」や「雑談自体の構造や機能」に関する研究が多かったが、これからは、「雑談の場における聴解能力」に関する研究も進められなくてはならない。そのためには、日本語学習者の聴解過程を詳細に探る研究が重要である。また、その成果を聴解教育に取り入れる必要もある。

キーワード：雑談、中級日本語学習者、聴解困難点、既有知識、文脈、不適切な理解

1. この論文の目的

日本語学習者が中級のレベルになっても、話しことばの特徴が多いカジュアルな雑談では、日本語母語話者の雑談の内容を正確に聞きとれないことがある。中級日本語学習者に日本語母語話者と雑談をしてもらい、雑談相手の話したことをどのように理解したのか詳

[†]大阪産業大学 人間環境学部文化コミュニケーション学科准教授

草 稿 提 出 日 8月30日

最 終 原 稿 提 出 日 8月30日

しく調査すると、雑談相手の話したことを不適切に理解していることが見つかる。

この論文では、中級日本語学習者が雑談をするときの聴解の困難点を明らかにする。

2. この論文の主張

この論文では、中級日本語学習者が雑談をするとき、主な聴解の困難点として、次の（１）と（２）があることを主張する。

- （１）自国の文化や習慣をふまえた既有知識で未知の語を推測してしまう失敗
- （２）前の文脈を聞いたことで、今聞いている発話を誤解してしまう失敗

（１）の聴解の困難点というのは、次のようなことである。日本語学習者の多くは様々な国や地域から日本語を学びに日本へやってくる。そして、多くの日本語学者は、多様な自国の文化や習慣を背景にして日本語を学習する。日本語学習者は、日本語母語話者との雑談で知らない語を聞いたときに、自国の文化や習慣から不適切な推測をしてしまうのである。

一方、（２）の聴解の困難点というのは、次のようなことである。本を読んだり文字を見たりしながら書いてある内容を理解する読解では、よくわからない部分を見直したり、繰り返し同じ部分を読んだりできる。しかし、音声を媒介にする聴解では、聞いているそばから、次々と新しい情報が入ってくるので、前に聞いたことが影響して、今聞いている内容を不適切に理解してしまうことがある。

この論文では、上の主張を述べるために、論文の構成を次の通りにする。

3. で調査の方法について説明し、4. で関連する先行研究について整理し課題を述べて、5. で雑談の成功事例と失敗事例を比較する。そのあと、6. と7. で中級日本語学習者が日本語母語話者と雑談をする時の聴解の困難点の主な事例を詳しく述べる。8. ではその他の聴解の困難点を述べて、9. でこの論文のまとめを行い、今後の課題についても触れる。

3. 調査の方法

中級日本語学習者が日本語母語話者と雑談をするとき、日本語母語話者が話した内容をどのように理解したかを客観的かつ具体的に調べるために、次の（３）から（５）の調査

を行った。

- (3) 調査協力者である中級日本語学習者一人ひとりに、日本語母語話者と20分から30分ほど雑談をしてもらう。その雑談の様子を録画する。
- (4) 調査協力者である中級日本語学習者にその録画を短く区切って見てもらい、雑談相手の話した内容を、その雑談時にどのように理解していたかを自分の母語で詳しく語ってもらう。
- (5) 調査協力者である中級日本語学習者の理解の仕方について、調査者（筆者含む）がその内容やそう理解した理由などを確認する必要があるとき、調査協力者に質問して答えてもらう。

この調査の協力者である日本語学習者は、日本語の聴解能力が一般的に中級レベルであると考えられる日本在住の外国人16人である。なぜ、調査の対象レベルを中級レベルにしたかと言うと、雑談をある程度まで理解できて、日本語母語話者とカジュアルな話が続けられるのは初級日本語学習者では無理であるし、もっと能力が高いと考えられる上級日本語学習者では聴解の困難点があり出ないだろうと予想できるからである。今回調査の対象となった中級日本語学習者は、さまざまな場面で日本語母語話者と日本語を使って雑談する機会を持ち、雑談をある程度は理解することが期待されていると考えられる。

調査協力者である中級日本語学習者の母語は、ベトナム語、フランス語、スペイン語、タガログ語、ペルシャ語、中国語、タイ語、英語、インドネシア語であった。調査の期間は、2014年10月から2015年2月にかけて行った。

4. 先行研究と課題

雑談に関する先行研究を調べるために、学術情報検索のデータベース（CiNii）を利用して検索した結果、次のような先行研究に関する情報を得ることができた。全文検索では今回の調査に関係のない論文も抽出されて154件であったが、論文検索では関係のある論文が抽出されて13件であった。

表 1. 雑談に関する論文件数（検索語：日本語教育、雑談）

| | |
|------|------|
| 論文検索 | 13件 |
| 全文検索 | 156件 |

※検索は、2015年2月23日現在

論文検索13件のうち、主な先行研究を具体的にあげると、次のような先行研究が見つかった。山崎真弓・広田妙子・本郷智子（2013）では、中級クラスにおける雑談会話の授業の実践を報告しており、その振り返り活動の試みを論じていた。また、河内彩香（2003）では、日本語の雑談データを対象にして、その話題展開機能と型を論じていた。これらの論考の他にもいろいろな先行研究が見つかったが、雑談に関する先行研究では、「雑談の場における会話能力」や「雑談自体の構造や機能」に関する研究が多かった。一方、「雑談の場における聴解能力」に関する研究はほとんどないが、野田尚史・阪上彩子・中山英治（2015）などに見られるように、本論文と同一の調査方法で関連した研究結果を報告する研究が出てきている。日本語学習者の聴解過程を詳細に調べる研究の重要性は高いと言える。

5. 雑談の聴解の成功と失敗

ここで改めて「雑談」とはどのようなものかを考えておきたい。複数の辞書の記述によると、雑談とは次のようなものであると説明されている。

表2. 辞書における雑談の記述

| | |
|--------------|--|
| 日本国語大辞典（第二版） | ざつだん【雑談】〔名〕 さまざまな話をする事。また、その話。とりとめのない話。世間話。よもやま話。ぞうだん。 |
| 広辞苑（第六版） | ざつだん【雑談】さまざまな談話。とりとめのない会話。 |
| デジタル大辞泉 | 【雑談】〔名〕さまざまな内容のことを気楽に話すこと。また、その話。とりとめのない話。「雑談をかわす」「友人と雑談する」 |
| 大辞林（第三版） | ざつだん【雑談】（名）スル 〔古くは「ぞうたん」とも〕さまざまなことを気楽に話し合うこと。また、その話。世間話。よもやま話。「－に時を過ごす」「会議のあと－する」 |
| 新明解国語辞典（第七版） | ざつだん【雑談】－する はっきりした目的もまとまりも無い話（を気楽にすること）。「－をかわす」 |
| 例解新国語辞典（第六版） | ざつだん【雑談】〈名・する〉 話題などをきめないで、気楽に話をする事。〔句例〕雑談にふける。〔類〕世間話。 |

これらの辞書の記述から、「雑談」とは「さまざまな話題がはっきりした目的もなく気楽に話されること」であると言える。ちなみに『広辞苑』（第六版）では、「談話」という

語も見えるので同辞書を確認すると、「だんわ【談話】はなし。ものがたり。会話。」と記述されており、また他の辞書でも「談話」は、「話をする事、会話、非公式にまたは形式ばらずに意見を述べる事、くつろいで話をする事」などの記述が確認できるので、ここでは特に違いはないものとしておく。また、この論文では使用する語も「雑談」で統一する。

今回の調査協力者である中級日本語学習者のデータには、この雑談の定義に当てはまるような典型的な雑談が多く含まれていた。たとえば、次の(6)、(7)がその事例である。

(6) 天気が話題の雑談 (母：母語話者，学：学習者を表す。以下同。)

母：んー，日本の気候とかはどうですか。

学：仕事？

母：気候，天気。

学：ああ，天気。

母：うん，フィリピンに比べたら。

学：あ，全然違うですね。

母：違う？ けっこう日本って春夏秋冬あるって言われているんですけど。なんか，春があって夏があって秋があって冬があって，フィリピンは違いますか。

学：全然違います。秋ないです。 (フィリピン人，タガログ語)

(7) アニメが話題の雑談

母：うん，好きなアニメ何かある？

学：子供のときに，ドラえもん。

母：あー，見てた？

学：うんと，コナン。

母：コナン，うんうん有名有名。

学：コナン，ダンタシ。

母：ダンシ？

学：detective.

母：あーあー，「名探偵コナン」ね。うんうんうん。 (ベトナム人，ベトナム語)

(6) は、日本語母語話者が初めに日本の気候に関する質問をして、学習者が「仕事？」と聞き返し、それに対して日本語母語話者が「気候，天気」と言い直して、学習者が「あ

あ、天気」と正しく理解している。天気の話題が正しく聞きとれたあとは、日本とフィリピンの気候（四季）の違いが続けられている。典型的な天気に関するとりとめのない会話である。

一方、(7)は、日本語母語話者が初めに好きなアニメを尋ねて、学習者が「子供のときに、ドラえもん」と答え、雑談が続いている。途中、学習者の「コナン、ダンタシ」が日本語母語話者には理解できなかったようだが、学習者の英語の言い換えによって雑談は落ち着いた。気楽なアニメの話題をする場面であり、聞きとらなければならない目的が前もってあるような雑談ではなく、聞きとりがうまくいかなかった場合には何らかのストラテジーを駆使して雑談が収束していくようなものであると言える。

実際の雑談には、日本語学習者が適切に理解した成功事例と不適切な理解をしてしまった失敗事例がある。この論文では失敗事例をあとから詳しく述べるので、ここでは成功事例を説明しておく。たとえば、次の(8)は、聴解の成功事例の一つである。

(8) 学習者：イラン人 母語：ペルシャ語

■日本語母語話者の発話

あ、なんか絵だけじゃなくて、建物もすごく凝りに凝って。

■学習者の正しい理解を表す発話

絵だけじゃなくて、建物もいい。でも、動詞を言わなかったの、よくわからなかったんですけど、すごくって言ったの。すごくというふうに言ったら、たとえば、建物が美しいとかそういうふうに思いました。

(8)の事例では、学習者は日本語母語話者の「凝りに凝って」という発話を初めは正しく理解できなかった。「凝りに凝って (いた)」と発話していたが、学習者の理解できる表現ではなかったので「動詞を言わなかったの」と答えている。しかし、そのあとで「すごく」という程度の高いことを表す語から後に続く文脈をうまく推測している。

次の(9)も聴解の成功事例の一つである。

(9) 学習者：インドネシア人 母語：インドネシア語

■日本語母語話者の発話

うんうん。で、1回、えーと、夕方くらいの時間だったかな、渋滞にはまってしまつて、全然動けなくて、すごく困ります。

■学習者の正しい理解を表す発話

1回、夕方ごろに、渋滞で、とても困りました。

(9)の事例では、学習者は日本語母語話者の発話の要所を適切に聞きとって、日本語母語話者の発話に対して正しい理解を示していた。

このように中級日本語学習者は、発話の要所を聞きとったり、聞きとれない語や表現に対して、推測の能力などをうまく使って聴解の困難点を回避できる場合があることがわかった。これとは反対に、中級日本語学習者は、聴解が困難になることも現実にはある。次の6. や7. では、聴解の失敗事例を取りあげて、その困難点の原因をデータに即して考察する。

6. 自国の文化や習慣をふまえた既有知識で未知の語を推測してしまう失敗

中級日本語学習者が日本語母語話者と雑談をするときの困難点の一つ目は、「自国の文化や習慣をふまえた既有知識で未知の語を推測してしまう」ような不適切な理解である。日本語学習者は、自らの生活習慣や社会的な知識背景などを持っている。知らない語やわからない表現があったときは、そうした既有知識が影響して不適切な理解を示すことがある。

たとえば次の(10)は、日本の文化や習慣をふまえた日本語母語話者の発話に対して、自らの文化や習慣に基づいた既有の知識で不適切に理解した事例である。

(10) 学習者：カメルーン人、母語：フランス語

母：あの、なんかホットシャワーがないところで、なんかこう、やっぱり暑い季節でも、あのわたしはやっぱりホットシャワーで、シャワーを浴びないと、こう、何か…

学：あー。

母：疲れが取れないみたいな。

学：あー。

日本語母語話者は、日本的な文化や習慣を反映した「熱いシャワーを浴びて疲れを回復する」ということを発話したのだが、カメルーン人の学習者は、この日本語母語話者の発話（下線部）に対して、「(お湯のシャワーを浴びないと)洗っていないような感じ。」と

不適切に理解した。つまり、「冷たい水のシャワーで体の汚れを取る」といった自国の文化や習慣をふまえた既有知識で不適切な理解をしたのであろう。

次の(11)も、自らの文化や習慣に基づいた既有の知識で不適切に理解した事例である。

(11) 学習者：インドネシア人 母語：インドネシア語

学：あー、はい。インドネシアで、雪は全然ない、のに。

母：もしかして、インドネシアの国内で、唯一雪があるところですか？

学：うん、そこだけ。

母：そこだけ？

学：そこだけ、雪。山。いつも、1年中、あ、寒いで、雪が…

日本語母語話者は、「唯一雪があるところですか？」とその場所だけに雪があるのかどうかを聞いていたのだが、インドネシア人の学習者は、この日本語母語話者の発話（下線部）に対して、「いつも、1年中」（二重線部）と不適切に理解した。あとのインタビューでも「いつもある雪。永久凍土。」と答えていた。つまり、「インドネシアの高山に万年雪がある」といった自国の文化や習慣をふまえた既有知識で不適切な理解をしたのであろう。

このように、中級日本語学習者は、自国の文化や習慣を踏まえた既有知識を持ち、その既有知識で雑談中に聞こえてきた未知の語や表現を推測してしまい、不適切な解釈をしてしまう。これが雑談の聴解困難点の主な原因の一つである。

7. 前の文脈を聞いたことで、今聞いている発話を誤解してしまう失敗

中級日本語学習者が日本語母語話者と雑談をするときの困難点の二つ目は、「前の文脈で聞いたことで、今聞いている発話を誤解してしまう」ような不適切な理解である。雑談を聞くときのような音声を媒介にする聴解では、聞いているそばから、次々と新しい情報が入ってくるので、前に聞いたことが影響して、今聞いている内容を不適切に理解してしまうことがある。

たとえば、次の(12)は、前に聞いた日本語母語話者の発話とその発話の理解に影響を与えるような文脈になり、今聞いている発話を誤解した事例である。

(12) 学習者：ベトナム人 母語：ベトナム語

母：ヤンゴンっていうところに外国語大学っていうところがあるんですけど。

学：はい。

母：そこの、そこにもミャンマー語、学科っていうのがあって。

学：あ、そのときは、初めて、ミャンマー語を勉強しますか？

(中略)

母：言語ではなく、歴史をやっています。

日本語母語話者の前の文脈の中に、「外国語大学」や「ミャンマー語」という発話（下線部）があり、そこから「ミャンマーの言語を勉強した」という誤った文脈を形成したのだろう。それは、このベトナム人の学習者が、「言語ではなく、歴史をやっています。」という日本語母語話者の発話（二重線部）に対して、後のインタビューで「言語だけではなく、歴史のことも勉強した」というように間違った解釈を発話していたことから明らかである。

次の(13)も前に聞いた日本語母語話者の発話とその発話の理解に影響を与えるような文脈になり、今聞いている発話を誤解した事例である。

(13) 学習者：インドネシア人 母語：インドネシア語

母：え、あの、日本の車ってけっこう世界で有名じゃないですか。たとえば、トヨタとか、ホンダとか… (中略)

学：うん、うん、トヨタの中に、いろいろな、なんか、種類が、ありますので、んー、なんかいろいろな人、いろいろなキューヨも、え、車買います。

(中略)

母：どっちが人気があるんですか。

日本語母語話者の前の文脈の中に、「日本の車ってけっこう世界で有名じゃないですか」という発話（下線部）があり、そこから「日本の車は世界で有名だ」という誤った文脈を形成したのであろう。それは、このインドネシア人の学習者が、「どっちが人気があるんですか」という日本語母語話者の発話（二重線部）に対して、後のインタビューで「高い種類と安いのと、トヨタの中にありますね。どちらが有名ですか。」というように間違った解釈を発話していたことから明らかである。

さらに、次の(14)のような事例も観察された。この事例は、6.の自国の文化や習慣を踏まえた既有知識により不適切な理解をする点と、この7.の前に聞いた文脈を聞いたことで、今聞いている発話を誤解する点が合わさったような事例である。

(14) 学習者：イラン人 母語：フランス語

母：私、フランスに夏行ったことがあるんですけど。(中略) お城とか行ったんですけど (中略) …

学：お城？

母：お城。なんでしょう。王様が自分の趣味で造った…お城とか。

学：あ、ああ。クリストの？

母：あ、そうですね。キリスト教とはあまり関係ないと思うんですけど。

日本語母語話者の前の文脈の中に、「フランスに夏行った」や「お城とか行った」という発話（下線部）があり、そこから「フランス旅行で、お城（未知語）という何かに行った」という文脈を形成したのであろう。このイラン人の学習者は、「お城」という未知語を含んでいたので、フランス旅行という前に聞いた文脈に合わせて、「フランスなら、[王様]は[神様]で、[お城]は[教会]だろう」という推測を行い、不適切な理解を示したのである。後のインタビューで、このイラン人の学習者が「王様を神様だと思ったので、お城を教会だと思いました。というのは、フランスでは教会が有名じゃないかと思った。」とも発話していたことは、その傍証となる。

このように、中級日本語学習者は、日本語母語話者との雑談の中で文脈を形成し、その前の文脈を聞いたことで、今聞いている発話に対して不適切な解釈をしてしまう。これも雑談の聴解困難点の主な原因の一つである。

8. その他の聴解の失敗

これまで、中級日本語学習者が日本語母語話者と雑談をするときの聴解の困難点の主な二つの原因を詳しく述べてきた。この8. では、そのほかの興味深い聴解の事例を挙げておきたい。

最初は、類似した音を誤解した事例である。次の(15)は、日本語教育の実際の指導の現場でも比較的よく観察される事例である。

(15) 学習者：中国人 母語：中国語

学：東京タワー。でも、あー、わたしはあの高いところが、こわいから、あの、友だちがああ、上に行った。でも、わたしは、あ、一階で。

母：あ、下で待ってたんですか？

学：はいはい、そうです。

母：のぼらなかったの？

学：はい。

母：えー、もったいない。せっかく東京タワーに行ったのに。

この中国人の学習者は、雑談の冒頭で「東京タワーに行ったが、高いところが苦手なので、一階で待っていた」ことを話した。これを聞いた日本語母語話者は「下で待っていたんですか？」と質問をして、学習者は「はいはい、そうです。」と答えている。ここまでの雑談の流れはスムーズであり、後のインタビューでも不適切な理解はしていなかった。

しかし、この後の日本語母語話者の「えー、もったいない。」という発話に対して、この中国人の学習者は、「問題ないですか？ 東京タワーに行ったのに。」と不適切な理解を示した。これは、「もったいない」と「問題ない」との間にあった、類似した音の聞き誤りであると考えられる。中国人の学習者は、日本語学習において、漢字の優位性を発揮し、文字の認識に強い面が見られたりするが、反対に、文字に頼ることが過ぎると、聴解などにおいては弱い面が見られたりすることがある。

次の(16)と(17)は、部分的な音を聞いて適切な理解をした事例と不適切な理解をした事例である。この二つの事例は、同じ学習者の事例である。

(16) 学習者：イラン人 母語：フランス語

母：今、どこらへんに住んでいるんですか？

学：今？ 寮です。

(17) 学習者：イラン人 母語：フランス語

母：白川郷にどうして行ったというか、何したんですか？

学：あ、どうして？…

この(16)は、日本語母語話者が学習者に対して、現在、どこに住んでいるのかという単純な質問をした場面であるが、学習者は後のインタビューで、「何か言って、住んでいますかと言って、何か言ったのですが、疑問詞でした。私がいわからなくて。単語の最初が[ど]だったので、[どこ]だったとか、[どう]だったかだと思います。」と答えていた。そして、実際の雑談では、住んでいる場所を聞かれたのだと推測し、うまく返事を返している。「どう…住んでいるんですか？」という発話は統語的には可能であっても意味的に

はおかしく、この場合は「どこ…住んでいるんですか？」という発話の方が適切であると推測したのであろう。「どこらへん」という話しことばの表現も影響したと考えられる。

一方、(17)は、日本語母語話者が学習者に対して、その白川郷で何をしたのですかという質問をした場面であるが、学習者はあとのインタビューで、「白川郷へ、なぜ行ったんですか。一緒に一つ単語を言ったんですが、わからなかったです。」「[なに]何か言って、[ですか]その間がわからなかった。」と答えていた。そして、「どうして行ったのか」という前の質問だけ聞きとれたので、その質問をくりかえして、「あ、どうして？」と発話している。インタビューの回答にあるように、「なに」と「ですか」という部分的な音だけは聞きとれたのだが、「なにしたんですか（なにをしたのですか）」の「したん」の部分が話しことばのくだけた表現だったせいもあって、理解できなかったのであろう。

そのほかの聴解の失敗に当たる最後の事例は、未知の語を聞いて既知の漢字を推測した事例である。次の(18)は、日本語母語話者が使用した語が未知の語であったため、既知の漢字の知識を推測に利用して、不適切な理解をしてしまった事例である。

(18) 学習者：ベトナム人 母語：ベトナム語

母：(ミャンマー語の文字数について、聞かれて) あ、あえ、や、日本語の方が多
 いです。だから、ミャンマーは、えと、子音っていうの、わかりますか？

学：あ、シン？

母：あ、し、えーと、文字が33文字しかないんですよ。

このベトナム人の学習者は、日本語母語話者が使った「子音」ということばがわからなかったのだが、その「子音」という語の音も「シンジ」と聞きあやまり、既知の漢字である「新字」という漢字をあてはめて、不適切な理解をしてしまった。

このあとのインタビューで、「日本語の文字の方が多いです。ミャンマー語の方には [シンジ] というのがあって、私には、その [シンジ] ということばの意味を聞いてきました。」「文字はその33文字しかないんですけども、変化をさせて新しい文字を作ります。」「[シンジ] というのは、そうですね、シン(新)とジ(字)で、新しい文字という意味でしょうか。」と答えている。

一般的に日本語は同音異義語が多いと言われている。同音異義語の聞きとりでは正しい漢字の推測ができれば適切な理解につながると考えられるが、この事例のように正しい漢字の推測が不適切な理解を引き起こしてしまうこともある。

9. この論文のまとめと今後の課題

この論文で述べたことをまとめると、次の（19）から（21）のようになる。

- (19) 中級日本語学習者は、自国の文化や習慣をふまえた既有知識で未知の語を推測してしまうことがある。たとえば、「熱いお湯でシャワーを浴びて疲れを取る」という日本的な文化を背景にした発話が理解できず、「冷たい水でシャワーを浴びて、汚れを取る」というふうに自国の習慣をふまえた不適切な理解をしたりする。
- (20) 中級日本語学習者は、前の文脈を聞いたことで、今聞いている発話を誤解してしまうことがある。たとえば、「(ミャンマーの) 言語を勉強した」という文脈を形成した後で、「言語ではなく、歴史をやっています。」という発話を「言語だけでなく、歴史も勉強した。」というふうに誤解をしたりする。
- (21) そのほかに、類似する音を聞きあやまったり、部分的な音を聞いて聴解に成功したり失敗したりすることがある。また、未知の語に対して既知の漢字をあてはめて不適切な理解をすることがある。

日本語学習者の聴解や読解にかかわる理解過程の研究には、まだ残された課題が多くあり、これからの重要な研究課題である。また、日本語学習者の理解過程が解明された後は、そのような実証的な研究にもとづいた教材作成も必要である。

付記

この論文の内容は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「日本語学習者のコミュニケーションの多角的解明」の研究成果を報告したものである。また、この論文のために協力をいただいた調査実施者の阪上彩子さん、首藤美香さん、中北美千子さん、そのほか多くの調査協力者のみなさんに感謝を申し上げます。

引用文献（雑談の研究に関するもの）

- 河内彩香（2003）「日本語の雑談の談話における話題展開機能と型」『早稲田大学日本語教育研究 3』, 41-55, 早稲田大学
- 野田尚史・阪上彩子・中山英治（2015）「中級学習者が雑談に参加するときの聴解の問題点」
The 22st Princeton Japanese Pedagogy Forum Proceedings, 142-152, Princeton, NJ:
Department of East Asian Studies, Princeton University

山崎真弓・広田妙子・本郷智子（2013）「中級クラスにおける雑談会話の実践・振り返り活動の試み」『日本語教育方法研究会誌 20（1）』，110-111，日本語教育方法研究会

参考にした辞書

『広辞苑』（第六版），新村出 著／編集，岩波書店，2008年

『新明解国語辞典』（第七版），山田忠雄・柴田武・酒井憲二・倉持保男・山田明雄・上野善道・井島正博・笹原宏之 編，三省堂，2011年

『大辞林』（第三版），松村明 編，三省堂，2006年

『デジタル大辞泉』，監修／松村明，編集委員／池上秋彦・金田弘・杉崎一雄・鈴木丹士郎・中嶋尚・林巨樹・飛田良文，小学館国語辞典編集部編集，小学館，2012年（書籍版刊行）

『日本国語大辞典（第二版）』日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編，小学館，2000-2002年

『例解新国語辞典』（第六版），編著／林四郎・野元菊雄・南不二男・国松昭，三省堂，2002年